

研究題目

通級指導教室における一側性難聴児への支援

～先天性、後天性等、失聴時期に合わせた支援で一側性難聴児を救う～

目 次

- 1 研究の背景
- 2 研究の目的
- 3 当難聴通級指導教室の概要と指導開始までの流れ
- 4 一側性難聴児への支援 ～当教室において～
- 5 一側性難聴児への支援 ～連携をとおして～
- 6 成果と課題

新潟県上越市立大町小学校 教諭 呉竹 七恵

1 研究の背景

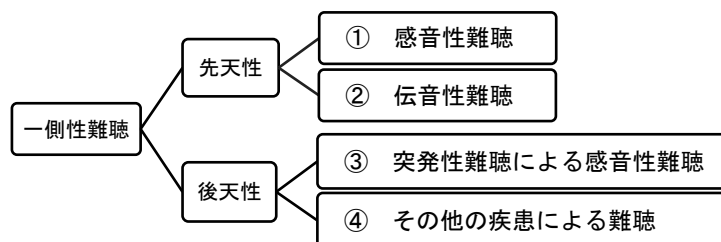
(1) 一側性難聴児にスポットライトを

「片方聞こえているから大丈夫ですよ」耳鼻科医から、保護者から、担任の先生から、よく聞く言葉であるが、本当にそうだろうか。聞こえにくさによる不安を軽減させるための言葉なのかもしれないが、難聴通級指導教室担当者としては無責任な言葉だと思う。一側性難聴の通級児童生徒数は年々増加しており、「小さい声だと聞こえないんだよね」「右側から言われると聞こえなくてつらいんだけど言えない…」 「何回言っても忘れられる」など一側性難聴児の話を聴けば聴くほど、困ることや悩みが見えてきて、支援の必要性を感じる。しかし、全国的に一側性難聴を通級指導の対象としている都道府県は極めて少ないのが現状である。難聴が片耳であっても両耳であっても、聞こえにくさがあることに変わりはなく、難聴について正しく知ったり、自分の聞こえ方を知り自己と向き合ったり、「聞こえにくい中、集中して聞きながら生活している」という自分の頑張りを認められたりする場が必要であるという考えのもと、筆者は一側性難聴児への通級指導を行っている。本研究において、一側性難聴児にスポットライトを当て、具体的な支援を明らかにすることで、より多くの難聴通級指導教室で一側性難聴児への支援が行われることを願う。

(2) 一側性難聴について

一側性難聴とは、片耳が聞こえない、もしくは聞こえにくい状態のことであり、両耳で聞くよりも3～6 dBほど小さく聞こえると言われている。静かな場面では聞き取りにくさが生じにくく、補聴器を着けるケースも少ないため、聞こえにくさや心理的苦悩を周囲の人々に理解されにくい状況にあるが、難聴耳側からの会話音や環境音の聴取が難しく、騒音下での会話理解や音源定位などに影響があると考えられている。岡野・廣田（2014）によると、一側性難聴児は、周囲に難聴を開示しない傾向にあり、一側性難聴児と軽度難聴児では質的に異なる問題点があると考えられている。本人や家族、教育関係者に対して十分な理解を促し、一側性難聴児の状況に応じた支援・指導の必要性が示唆された。また、岡野・廣田（2015）からは、養育者には、当事者の発達段階に応じた情報提供や、同じ一側性難聴者との交流など、診断時からの生涯発達の視点での助言と支援の必要性が示唆された。

一側性難聴を呈する疾患は様々であり、音を感じる部分（内耳や聴神経）に原因がある場合は感音性難聴、音を伝える部分（外耳や中耳）に何らかの原因がある場合は伝音性難聴となる。生まれた時から片耳が聞こえにくい先天性難聴と聞こ



〈図1 一側性難聴児の失聴時期と主な種類〉

えていた期間があつて後天的に片耳が聞こえにくくなった後天性難聴では、聞こえにくさの受け止めや困り感が大きく異なる。そのため、失聴の時期や困り感に合わせた指導が必要であると考え。

2 研究の目的

本研究では、一側性難聴児の失聴時期や失聴の背景に着目して、一人ひとりに合わせた指導実践を行う。難聴通級指導教室での学習記録やワークシートの記述内容から、一側性難聴児に寄り添った支援の在り方を検討する。

3 当難聴通級指導教室の概要と指導開始までの流れ

(1) 上越市立大町小学校難聴通級指導教室の概要

当校の難聴通級指導教室の歴史は古く、昭和46年に難聴学級として開設され、市内だけでなく、近隣の難聴通級指導教室のない他市の児童生徒の指導も行っている。校内には言語障害通級指導教室2教室と当教室があり、全教室に防音整備が施されている。また、防音室と聴力検査機器も設置されており、校内で聴力検査を行うことができる。当教室の難聴通級児童生徒数は、令和3年9月末で38名であり、その内、措置外（特別支援学級在籍や教育相談等）の児童生徒は14名である。

(2) 指導開始までの概要

当校の難聴通級指導教室（以下、当教室）につながる経路は、小学校・中学校・聾学校等からの紹介と医療機関からの紹介が主である。紹介された保護者が当教室に電話をし、通級担当者と初回面談を行う。基本的には親子で来室してもらい、子どもに純音聴力検査や語音聴力検査を行っている。聴力検査の結果を子どもと保護者と共に確認し、当教室の学習内容や今後の流れを説明し、通級希望の有無を聞く。大半の方は通級を希望し、聴力の状態や子どもの学年、実態等に応じて週2回から月に1回の個別指導やグループ指導を行っている。当教室担当者は、近隣にある中学校に兼務しているため、小学1年生から中学3年生までを通級対象とすることができる。そのため多くの難聴通級児童生徒が通級開始時から中学卒業時まで、通級指導を継続している。

4 一側性難聴児への支援 ～当教室において～

(1) 発見から通級指導開始までの経緯

一側性難聴児と言っても一人ひとり聴力や失聴時期によって、困り感は異なる。図1に沿って、失聴時期や失聴の背景に着目し、いくつかの事例から一側性難聴が発見されるまでの経緯と通級指導が開始されるまでの問題点、難聴通級指導教室の役割等を考えていきたい。

【① 先天性感音性難聴の場合】

このケースは、新生児スクリーニング検査や3歳児健診等で発見されることが多い。聴力の程度は軽度から重度まで様々だが、地域の耳鼻科を受診し、経過観察のため定期受診をしている。先天性の場合、子どもが低学年の間は、難聴の自覚がほぼなく、困り感もないため通級指導につながらないことが多い。高学年になり、良聴耳を前に出す等の傾聴が増えたり、学校での困り感を自覚し始めたりしたタイミングで、耳鼻科医から紹介されて通級指導を開始することが主である。この場合、聞こえにくさの自覚を促したり、実際に困っている場面での対応を考えたりすることから通級指導を始める。

【② 先天性伝音性難聴の場合】

当教室の先天性伝音性難聴の児童は5名であるが、発見時期や定期受診の流れは上記の感音性難聴の場合と同様である。大きく異なるのは手術による聴力改善の可能性があるという点だ。医療技術の進歩により、手術による聴力改善の可能性があると言われて当教室につながる児童生徒数は年々増えている。この場合の手術は耳小骨に関わる手術が多いが、顔面神経に近い場所の手術であり、手術をしても聴力がどこまで改善するかは分からないと言われているため、リスクがある。リスクを分かった上で手術を受けるかどうか、子どもが自分で決められるように、通級指導教室で学習することを耳鼻科医から勧められて当教室につながるケースが増えてきた。耳小骨の手術は対象年齢が高学年以降となるため、小学3年生から5年生で通級指導を開始することが多い。現在、伝音性一側性難聴のうちの2名は、元々は両耳の伝音性難聴で、1名は先述のアブミ骨手術を、もう1名は鼓膜形成手術を、両耳とも行ったが片側の聴力が平均30dB以下にならず、一側性難聴となったケースである。

【③ 突発性難聴（急性難聴）の後遺症による場合】

突発性難聴の後遺症やおたふく風邪の後遺症により、一側性難聴になった児童生徒は少なくない。突発性難聴を発症した時期が幼児期から低学年の場合、難聴の自覚がなかったり、親に聞こえにくさをはっきり伝えることができなかったりして、受診が遅れ、難聴が定着するケースが多い。この場合、保護者が「もっと早く受診させていれば…」と自責の念に駆られることが多く、保護者のケアも重要となる。また、このような急性難聴の場合、失聴が発見されてから入院治療を行うことが多く、治療した結果、聴力が改善しないという、つらい現実を突き付けられることになる。突発性難聴の場合は、耳鼻科から当教室を紹介されてつながることが大半であるが、突発性難聴の後遺症によるケースは重度難聴であることが多く、聞こえる状態から突然全く聞こえなくなった子どものショックは計り知れないものがある。

通級開始時は子どもと保護者のショックを受けとめ、緩和することから始める。

【④ その他の後天性難聴の場合】

後天性難聴は原因不明のことが多く、難聴の程度は軽度から重度まで様々であり、変動するケースもある。就学児検診や学校検診で発見されることが多いが、いつから聞こえにくかったのかが明確にならないことが多い。聞こえているように見えていたため、保護者は我が子が難聴であることを受け入れにくく、通級指導開始時までには複数の耳鼻科を受診しているケースも少なくない。子どもに困り感が出てきたり、補聴器の装用を検討し始めたりするタイミングで、耳鼻科医から紹介されて当教室につながる人が多い。このような場合は、今後生じるであろう一側性難聴の一般的な困り感を伝え、当教室につながってくれたことを感謝しつつ、ゆっくり親子の難聴理解を進められるようにしている。

先天性難聴か後天性難聴かによって、子どもの困り感や心理状況、また保護者の心理状況も異なる。失聴の時期や、当教室につながった背景に着目し、それぞれに応じた指導を開始することで、子どもと保護者の気持ちに少しでも寄り添うことができるのではないかと考える。また、当教室では地域の耳鼻科医から紹介されて通ってくる子どもが多くいるが、まだ特定の耳鼻科医としか連携ができていない。連携ができていない耳鼻科医に通っていた一側性難聴児童生徒は通級指導につながるまでかなりの年月が経っていたり、突発性難聴等で心理的ケアが必要だった時期にケアがなされなかったりしていた。今後、より多くの耳鼻科医に当教室の取組を知ってもらい、通級指導に協力してもらおう必要があると考える。

(2) 個別学習の取組

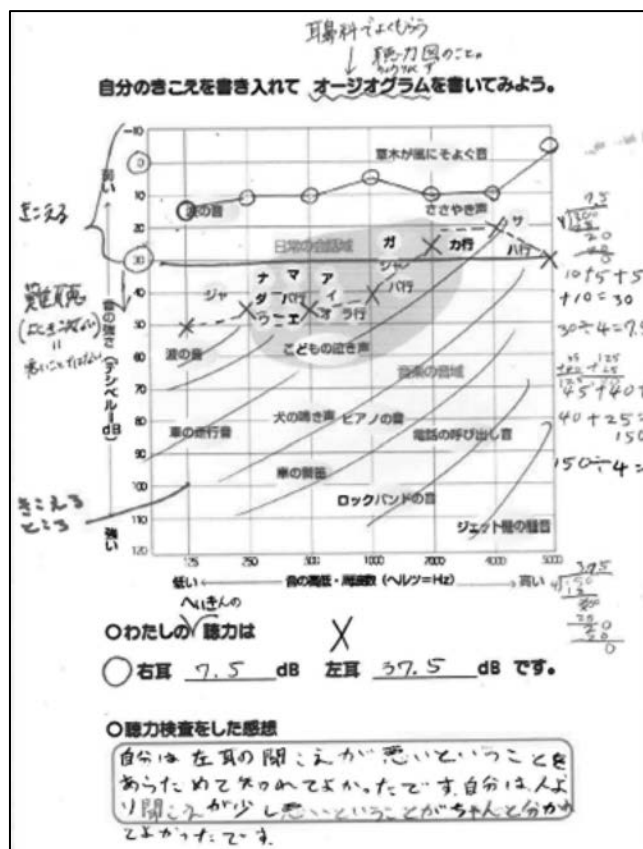
当教室では、一側性難聴には月に1回から2回の通級指導を行っている。指導の内容は、一人ひとりの聴力や困り感、失聴時期等に合わせて異なる。いくつかの事例から、失聴時期に合わせた指導の流れや一側性難聴児の困り感を明らかにする。

【先天性一側性軽度難聴のA児の事例】

先天性の左耳軽度難聴のA児は1年生から通級指導を開始した。1年生から3年生までは聞こえにくさの自覚がなかったため、語彙拡充のための言語指導と自己の聞こえ方の学習を中心に行ってきた。

学年が上がるにつれ、どちらの耳が聞こえにくいかわかるようになってきたが、軽度難聴で聞こえる音もあるため、「少し聞こえにくいのは分かっているけど、どれくらい聞こえにくいのか分からない」と言うことがあった。

そこで、小4の2月に自分で自分の聴力検査をしてみることにした。検査の手順を説明し、音が聞こえ始めた大きさを聴力図（オーディオグラム）に書き込んでいく。（図2）よく言われている「聴力」というのは4分法の平均聴力のことで、実際に計算して出してみたり、聴力図から、A児は低い音が聞こえにくいことなどを確認したりした。実施後のA児の感想には、「ちゃんと分かってよかった」と書かれており、軽度難聴という曖昧な聞こえ方だからこそ、子どもが知りたいと思った時期に身をもって自分の聴力を知ることが大事だと考える。



〈図2 A児の書いた自分の聴力図〉

【突発性難聴により一側性重度難聴になったB児の事例】

当たり前聞こえている状態から突然聞こえなくなった子どもの精神的ショックは非常に大きい。突発性難聴により小2の12月に右耳重度難聴になったB児は、小3の7月に当教室とつながった。自分が突然聞こえなくなったことで親がショックを受けている様子を目の当たりにすると、気を遣って悩みや不安を言わずに我慢する子どもが多いため、まずはB児が聞こえにくくなったことについての気持ちや今の悩みを吐き出せるように話を聴くことを大事にした。初回の通級指導でB児は担当者に「きこえの教室は聞こえるようにするところ？」と聞き、今頑張っ

どうしているか おしえて ☆彡
10月2日

・私が聞き取りにくいのは…(場所、音、人)
小さい声でしゃべられると
右があでしゃべられると

・先生の言っていることや友達の言っていることが聞き取りにくい時は、どうしている?
「ごめんもういらいって」と言う。
ほかの人におしえてもらう。

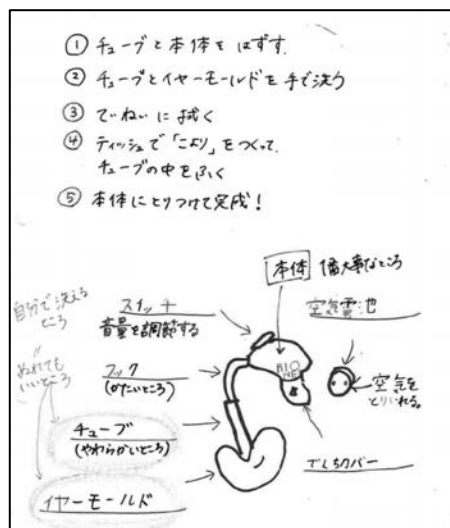
・まわりの友達にきこえにくいことを知っている?
知っている・知らない・(知ってほしい)・知られたくない

2年生の時、先生が言ってくれたからまわりの同じ方々のみは、矢口、している。矢口、している人もいるけど、矢口、みえる。

〈図3 B児の書いたワークシート〉

ていることについて「耳が早くよくなること」「聞こえるようになるように頑張っている」と答えたため、まだ聞こえるようになる可能性があると思っている様子であった。なるべく早い段階で、もう聞こえるようにはならない現実を伝えた方が良くと考え、自己の耳の状態について正しく知る学習を行うことにした。補聴器を着ければ聞こえるようになると思っていたB児はショックを受けていたが、B児と同じような一側性難聴の人はきこえの教室にたくさん来ていること、不安なことや辛い気持ちを話すためにきこえの教室があること等を伝えると、少し安心した表情になった。B児の困り感は強く、今のクラスの人にも聞こえにくいことを知ってほしいと思っていた(図3)ため、一緒に伝えたい内容を考えて、3年生の1月に在籍学年に難聴理解授業を行った。

【一側性中等度難聴で補聴器装用を検討することになったC児の事例】



〈図4 C児の書いたワークシート〉

C児は滲出性中耳炎を繰り返しており、聴力の変動もあったため、明確な失聴原因や時期は不明だが、1歳から耳鼻科にて定期受診を受けていた。高学年になり、中学校進学に向けて、補聴器を試してみるということ

4/9 ~ 4/22

きこえの教室
補聴器つけてみよう表

名前 _____

できるだけ、つけてみましょう☆ ぐるぐる回したら、外してケースに入れる。

つけた日だけ、シールをはきましょう。

日付	9日(金)	10日(土)	11日(日)	12日(月)	13日(火)	14日(水)	15日(木)
つけた?							
つけた時							

よかったところ・便利のところ	よかったところ・不便のところ
いろいろな音がたくさん聞こえた。先生のお言ひや友だちのお話が前よりよく聞こえました。	マスクをとるときがたいいんです。

おうちの方から一言☆

朝、着替えが終わると進んでつけていました。電池交換も自分でできて、2週間ですいぶん慣れたようです。

〈図5 C児と保護者が記入した補聴器つけてみよう表〉

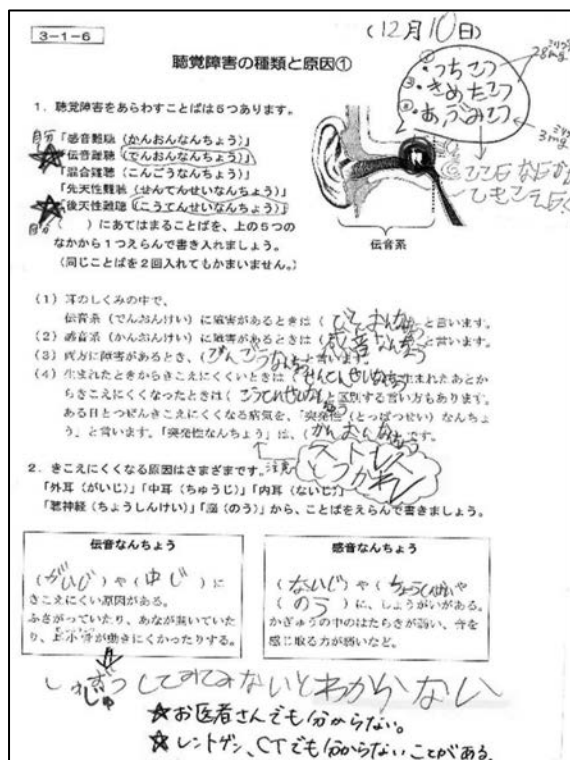
で小5の3月に当教室につながった。補聴器の試聴開始に伴う来室だったため、まずは補聴器の基本的な操作と管理方法を確認し(図4)、補聴器つけてみよう表(図5)に装用状況を記録してもらい、経過を見ることにした。一側性難聴の場合、補聴器によって聞こえにくい耳の方向からも音が聞こえるようになるため、嬉しさを

感じやすいが、騒音下等でかえって補聴器が不要になることもある。試聴期間を十分にとり、本当に必要かどうかをじっくり考えられるようにした。

【一側性中等度伝音性難聴で手術を検討することになったD児の事例】

D児は就学児検診で難聴が発見され、経過観察をしていたが、手術による聴力改善の可能性があり、小3の1月に通級につながった。D児とは、まず自分の難聴の原因や種類について知ることから始めた。(図6)

そして、D児の場合は手術で聴力が変わる可能性があるが、どれほど変わるかは手術をしてみないと分からないこと、手術の具体的な内容やリスク等の学習を進めた。手術をしても聴力がどれほど変わるかは分からないため、自分で決めることが大事だと考え、時間をかけてD児に十分に情報を与え、じっくり考えられるようにした。この経過を保護者にも伝え、保護者と共に見守った結果、D児は手術を受けることを決意し、小4の7月に手術を受け、聴力の改善が見られた。



〈図6 D児の書いたワークシート〉

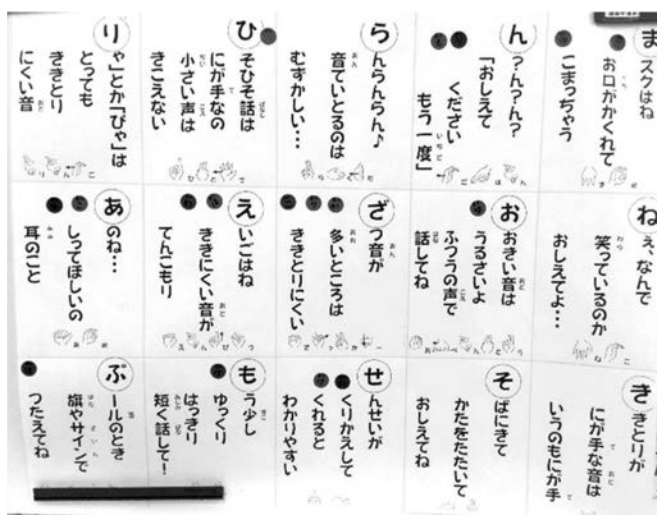
(3) グループ学習の取組

当教室に来ている一側性難聴児の多くは「クラスの中で耳が聞こえにくいのは自分だけ」という状況であり、孤独さを感じている。そこで、同年代の難聴児と出会うグループ学習や、成人の難聴の方の経験談を聴く機会を設けた。グループ学習では、一側性難聴児同士が出会い、活動したり互いに聞こえにくさについて話し合ったりしている。当事者同士だからこそ分かり合えることがあり、ピア・サポートの場になっていると考える。また、一側性難聴児が成人の一側性難聴の方に出会う機会は非常に少なく、将来像を築きにくい。成人の難聴の方と出会い、経験談を聴くことで、自分の将来を前向きに考えられる機会になると考える。

【5年生の一側性難聴児のグループ学習の事例】

活動名：『難聴あるあるTOP3』

本活動は8名の一側性難聴児で実施した。8名の中には学級に自己の難聴を開示している子どもと、開示したいけどまだしていない子どもがいた。そこで、「難聴理解かるた」（難聴児支援教材研究会が作成している教材）の読み札の中から、自分の共感できる「あるある」の札を3枚選び、それぞれ選んだ札を聴き合うという活動を行った。自分の難聴認識を深めるとともに、他の難聴児ときこえにくさを共通理解することで安心感や仲間意識をもってほしい、開示することへの抵抗感をやわらげたり開示方法を考えたりするきっかけになってほしいと思い、実施した。自分のTOP3を選んだらそれぞれ丸シールを掲示されている読み札に貼り（図7）、「あるある」が集まった札や一人だけ選んだ札などの説明をそれぞれ話し合った。授業後の感想では、「自分と同じことを書いている人が結構いてちょっとびっくりした」、「自分と選んだかるたが違っていても分かる！と思うのがあった。みんなの難聴あるあるが分かって良かった」、「へーっていうのがよくあった！人によって難聴あるあるが違った」などが書かれていた。改めて自分の聞こえにくさと向き合うとともに、他者理解にもつながる活動であったと考える。



〈図7 一側性難聴児の「難聴あるある」〉

【成人の難聴の方の経験談を聴く事例】

活動名：『ようこそ 先輩！』

一側性難聴児が成人の一側性難聴の方に出会う機会や、その方々の話を聞く機会は非常に少なく、自分にはどんな仕事やアルバイトができるのか、大人になったら聞こえにくいことをどうやって言うのか等、漠然とした不安を抱えている一側性難聴児は多い。

そこで、成人の一側性難聴の方を講師にお呼びし、経験談を聴く会を開いた。対象は小4～中3とし、中学生も集まりやすい17時から行った。講師の方は大学院生だったため、子どもたちと年齢が近く、親近感を持って話を聴いている様子が見られた。体育館での部活動は、ボールの音に声がかき消されて聞きづらかったこと、音楽を聴く際にイヤホンをする時は、周りの人に無視していると思われぬように

両耳にすること、大学入試の際の特別措置やアルバイトのこと等、多岐に渡り、経験談を話していただいた。困ったことだけでなく、良かったこと等も話してほしいと依頼したことで、「大きくなった時の話を聞けて良かったです。参考になったし、明るく考えようって思えました。聞き返していこうとも考えることができました」「自分もこれからいろんなことがあるけどがんばりたいと思いました」等、前向きな感想が多く見られた。講師を見つけることは簡単ではないが、多方面から情報収集を行ったり、当教室の卒業生に声を掛けたりして、今後も継続して行っていきたい活動である。



〈図8 「ようこそ先輩!」の様子〉

5 一側性難聴児への支援 ～連携をとおして～

(1) 通級児童の在籍校との連携

一側性難聴児を支援するために欠かせないのが、普段生活している在籍校との連携である。一側性難聴児が学校で生き生きと自分らしく過ごせるようになるためには、友達や担任など周囲の理解や支援が重要である。通級担当者は在籍校での授業の様子を把握し、その時々で必要な支援を行うために学校訪問を行い、担任をはじめ特別支援教育コーディネーターや管理職の先生方とも連携を密にとる等の環境調整を行っている。

① 授業参観

一側性難聴児の生活する学級を訪問し、授業や休み時間の様子を参観している。通級指導教室では分からない、友達との関係性や教科等の学習状況を見ることができる貴重な機会である。聞こえにくそうな場面などがあれば、具体的な解決策を一緒に考えることができる。参観後の通級指導で難聴児から友達の話やテストの話が出ることも多く、在籍学校と通級での指導がよりつながっていくことを感じる。毎年必ず行うようにしている。

② 支援会議や情報交換会

授業参観後や一側性難聴児のニーズに応じて、支援会議や情報交換会を実施している。担任、特別支援教育コーディネーターと通級担当者が主な参加者で、必

要に応じて保護者や管理職の先生に参加していただき、一側性難聴児の情報交換を行っている。子どものことを中心に各担当者が顔を合わせて話すことで、家庭と学校と通級指導教室の支援がつながっていくことを感じる。

③ 難聴理解授業

一側性難聴児は補聴器を着けていなかったり、静かな環境では会話がスムーズに成り立つことが多かったりするため、周りの友達が難聴のことを全く知らないケースが多い。しかし、話を聴くと、困っていることは多くあり、「周りの人に知ってもらいたい」という一側性難聴児は少なくない。そこで必要に応じて、在籍校へ通級担当者が出向いて難聴理解授業を行っている。

【難聴理解授業の事例】

先述のB児の学年で行った難聴理解授業を例に挙げる。

〈事前学習〉

聞いた項目	B児の回答
理解授業をしてもらいたい理由	聞こえない右側でずっと話されるとつらいし、「え？」とか「もう1回言って」って何回も言うと、しつこくて嫌われちゃいそうだから。みんなに知ってほしい。
授業で知ってもらいたいこと	右耳が聞こえにくいこと。聞こえにくい方から喋らないように気を付けてほしいです。

B児は先述のとおり、学級での困り感があり、学級の人に自分の聞こえにくさを分かってほしいという気持ちがあった。そこで、どんなことを知ってもらいたいかや、どんなことをしてもらおうと自分は聞きやすくなるかを考え、共に理解授業をつくっていった。また、周りにしてもらいたいことだけでなく、自分には何ができるかも考えるようにした。

〈難聴理解授業〉

授業の主な流れは、①きこえの教室の紹介、②一般的に聞こえる音の大きさや高さについて、③一側性難聴の体験（片耳を塞いで話を聞く、雑音下で話を聞きとる等）、④一側性難聴の困ること、⑤してくれると助かること（「ま：前から話す」「ゆ：ゆっくりはっきり話す」「ひ：一人ずつ話す」）、⑥質問・感想記入である。B児と相談して、①の際にB児もきこえの教室に通っていることを話すことにして、授業を進めた。



〈図9 B児の在籍学年に行った難聴理解授業のPPT資料〉

〈事後学習〉

聞いた項目	B児の回答
理解授業の感想	みんなにちゃんと聞いてもらえたから安心しました。自分でもどうしたら聞こえるか、考えることができました。
授業の後、友達に変化はあった？	前から話してくれるようになりました。
授業の後、自分の気持ちに変化はあった？	みんなにしっかり知ってもらったから良かったです。聞こえる耳の方を前に出す。「もう1回言って」と言おう。

「ちゃんと聞いてもらえたから安心した」という記述からも分かるように、一側性難聴児は、周りの人に聞こえにくさを知ってもらいたい気持ちだけでなく、受けとめてもらえるか不安な気持ちも併せもちながら、難聴理解授業に臨んでいる。そのため、難聴理解授業の最後には、B児が勇気をもってみんなに自分の聞こえにくさを伝えたということを必ず話すようにしている。

授業後のB児のように、難聴理解授業後の一側性難聴児からは知ってもらえて安心したという声が多く聞かれる。また、授業後の他の児童の感想からは「〇〇さんが片耳聞こえなかったことを初めて知りました」「これからは前から話すようにしたい」などの感想が多く寄せられる。一側性難聴児の聞こえにくさが気付かれにくいことを改めて感じる。

(2) 保護者との連携

一側性難聴児を支援する上で、保護者との連携は非常に重要である。保護者の難聴の受け止めは子どもに直接伝わり、それが一側性難聴である自分という自己像を築いていく上で大きな影響をもたらすからである。子どもと同様に、保護者が一側性難聴について正しく知ることができるようにすることも当教室の役割であると考えられる。また、突発性難聴などの後天性難聴で、難聴の発見が遅れた場合、保護者が自分を責めて来室するケースも少なくない。保護者の気持ちにも寄り添い、不安や

悩みを聴くことも重要である。しかし、保護者とじっくり話す時間はなかなかないため、保護者が通級指導の送迎で来室した際に必ず声を掛けるようにしたり、毎回の通級時の様子や家庭での様子を互いに書き込む通級ファイルを活用し、書いて伝え合ったりしている。

また、一側性難聴児を育てる保護者が集まって互いに悩みを相談する機会をつくったり、成人の一側性難聴の方を講師に呼び、経験談を話してもらう講演会を実施したりしている。子どもの将来への不安を抱えている保護者が多いため、今後も支援を続けていきたい。

6 成果と課題

一側性難聴児も両側難聴児と同じように困っていることがある、通級指導教室でできることがあるはずだと信じて、手探りで実践を行ってきた。一側性難聴児は一人ひとり、聴力や失聴時期、生活している環境が異なり、それぞれに難聴に関するライフストーリーがあるため、子どもの話をよく聴き、今求められているものは何かを考えながら教材をつくり、通級指導を行ってきた。「ここに来て良かった」「きこえの教室があったから自分の聞こえ方がはっきり分かったし、これからは怖くない」と話してくれる児童生徒がいたことが、これらの実践の成果だと考える。一方で注意が必要なのは、周囲の理解が得られていたり、自身の難聴理解が安定していたりする状態のときは関わりすぎないということである。環境が整っているときは困らないのが一側性難聴の特徴でもあるように感じる。必要なときに必要な支援を行えるように、距離感を保ち、細く長く付き合っていくことが重要であると考えます。

また、今回の実践から、一側性難聴児への支援は、個別指導だけでは不十分であり、同じ一側性難聴の子どもや先輩と出会う機会をつくること、在籍校への理解啓発を行い担任と連携すること、保護者の難聴理解を進め、保護者も安心できるように努めることの3点はどれも欠かすことができないと考える。この点から、通級指導教室担当者は、通級指導だけでなく、子どもと保護者と在籍校、病院、社会で活躍する一側性難聴の方々、その他関係機関等を「つなぐ」役割が大きいと言えるだろう。今後も、子どもと保護者と在籍校のかかわる人々をつなぎ、それぞれの話をよく聴き、寄り添いながら支援をしていきたい。

最後に、一側性難聴を対象としている通級指導教室は全国的に見て非常に少なく、実践を共有し合える状態ではないのが現状の課題である。一側性難聴も支援の必要性があることをより多くの人に知ってもらい、各地で一側性難聴児が救われるようになることを願う。

【引用・参考文献】

- 1) 井庭崇・長井雅史『対話のことば——オープンダイアログに学ぶ問題解消のための対話の心得——』丸善出版株式会社, 2018年
- 2) 岡野由実・廣田栄子「一側性難聴児の学校生活における実態と課題に関する検討」2014年, 『Audiology Japan』57巻2号, 156～166pp
- 3) 岡野由実・廣田栄子「一側性難聴事例における聞こえの障害と障害認識の経緯に関する検討」2015年, 『Audiology Japan』58巻6号, 648～659pp
- 4) 岡野由実・原島恒夫・堅田明義「一側性難聴者の日常生活における聞こえの問題と心理的側面についての調査——ソーシャルネットワークワーキングサービスを利用して——」2009年, 『Audiology Japan』52巻4号, 195～203pp
- 5) 藤巴正和「難聴者の障害受容過程に関する一考察」2002年, 『ろう教育科学』44, 13～23pp
- 6) 全国聴覚障害教職員協議会「365日のワークシート 手話、日本語、そして障害認識」